日毎の美女

田辺聖子

日毎の美女

田辺聖子
© Seiko Tanabe 1983

1983年9月15日第1刷発行
1992年2月14日第20刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-183109-7

日毎の美女

目次

美女山盛
日毎の美女
美女ちくわ
美女見本帳
美女恍惚
美女と竹の皮
美女づくし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

美女山盛（やまもり）

今日も荒井ガラスさんが来ていた。
この人が来るのは、仕事のこともあるが、ウチの会社の、美人社員・木原梢(きはらこずえ)が見たいためなのだ。ちゃーんとわかっている。
荒井ガラスさんは、梢に惚れている。（ウチの会社の男たちと同じく）
それで、やってくると、ぐるりーっとみまわして、梢がいると、
（ヌハハハハ……）
というように、思わず口元をゆるめ、ヨダレがたれそうな顔で、一瞬、心を奪われる。
ホカの女にみとれている男の顔ほど女からみて間抜けた、しまらないものはない。
おもしれえなあ。
荒井ガラスさんは息をはずませ、目をぱちくりして、カウンターをまわってはいってくる。
営業の席と経理の席にしか、用はないはずなのに、受付にいる梢に、チラチラと目をあてる。
その口元はゆるみっぱなし。
でも、梢は何にも気付かないで、伝票をホチキスで綴じたり、発信の封筒に切手を貼ったり、
というような高度な文化的作業に従事している。

あるいは、朝だと、デパートへ納入する品物に、そのデパートの値札を貼ったり、している。梢の仕事はこのほか、業界紙を綴じとく、とか電話番号訂正の整理だとか、電話番とか、要するに、会社に一人いてもらわなければこまる雑用係である。

いてもらわなければこまるが、いちめん、梢には、雑用係しかつとまらない、ということもある。

字は下手だし、（マッチ棒を面白がって寄せ集めたとしか思えない、バラバラな字画の字）性質がおうようだから、帳簿をつけさせると一ページぐらいすぐ飛ばしてしまうし、請求書を書かせると、ゼロの数をかきまちがえるし、計算機を使ってさえ、打ちまちがって、ユニークな答えを出す。バカではないのだが、要するに大ざっぱなのだ。

性質がおおらかにできている。

もっとも、それも無理はなく、梢は、会社の中で事務をするために傭（やと）われているのではない。私なんかは、ちゃんと入社試験（そろばんと常識問題と面接）をやって、事務能力、ならびに高潔なる人格を買われて入ったのだが、梢は元々デパートの派遣店員（はけんてんいん）だったのだ。

ウチの会社は、台所用品の卸し問屋である。金物部（建築金物と荒物は含まない）と、陶磁器、ガラス器に分れている。今橋（いまばし）のビルの中に会社があり、倉庫はちょっと離れているが、ビルの事務所には、七十人くらいの人間がいる。でもこのうち、二十人くらいはデパートの派遣店員である。

デパートというのはたいそうシブチン（けち）で、自分のところの人手不足を、問屋の派遣店

員で補っている。問屋は、自分の所でサラリーを出しているのだから、派遣店員を通じて自分の店の納品をより多く売ろうとする。

尤も、客からみれば、同じようなユニホームを着ているから、デパートの店員か、問屋の派遣店員か見分けつかない。品物について客が何かたずねたりしたとき、店員が、

「こっちの方がずーっと長保ちします」

などと気を入れてすすめたりすると、それは問屋からいっている子、ということになるかもしれない。

問屋の店員は、毎日、デパートの閉店後に数の少なくなったものをしらべて、注文をもらう。そうして翌日の朝、問屋から納入するよう手続きする。

デパート店員のように、ただ売りゃいい、というのとちがい、気ばたらきも、事務能力も要するのである。

木原梢ははじめ、そのつもりで傭われたのだそうだが、すぐ、デパート向きでないとわかった。

デパート派遣店員というのは阿呆ではつとまらぬのである。同じようにそこへ派遣されている女の子が、

「木原サンは気が利かないので、二人ぶんの働きせんならん」

とぶうぶういった。

木原梢は、毎夕、閉店後に、デザート皿が何枚売れた、グラスがいくら、などとこまかいことをするのは、気が遠くなりそうで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「性にあわないんです」
というのだ。
結局、木原梢のかわりに、アルバイトで来ていた「心利いた」女の子がデパートへ詰めることになり、梢は、会社の中で雑用係をすることになった。美人だが無能な女である。
梢は、そのほうがうれしいようだった。
「あたしもう、デパートみたいに気ィつかうところはいややわ。それに人が多いので、人に酔うてねえ」
と田舎者みたいなことをいっていた。そして切手貼りやエンピツ削り、お茶汲みといった「職場の花」的な仕事に変れたことを、よろこんでいた。
もともと、ビルにつとめるOLになりたかったそうである。
喜んでいるのは、会社の男たちもそうである。
美人の梢が事務所に入ってきたというのでイキイキと清新な気分がただよった。
男たちはそれまで私たちに、
「お茶！」
とぞんざいに叫び、
「○○商店に電話してくれたか！」
「これ、出しといてくれ！」
と遠くから手紙をポーンと抛る、そんないいかげんなことをしていたのだ。

それが梢にはわざわざ席まで発信物を持参し、
「これお願いします。カタログやから開封でよろし、すみませんねえ」
などと猫なで声を出す。
商売人の世界なので、男たちは、そうじてみな荒っぽく、盛大に洟をかんだり、オクビをもらしたり、
「カーッ」
と痰を吐いたりしてたくせに、梢がひとり加わってからは、みな、てのひらを返したようにお行儀よくなった。
若い独身社員だけでなくて、中年のおっさん連中までそうである。
お天気屋で気むずかしい、営業の桜井課長も豹変した。
梢の席を、自分のとなりに持って来て、いつもにこにこと梢をからかっている。
この課長はサクランボほどもあるでっかい判コをおすときが、たいそううるさい。
「なんでこんな値ェにしてん」
と文句たらたらいい、なかなか判コをおさない。また、接待の出金伝票も、みっちり油をしぼってからでないとおさない。
しかるに、私のみるところ、横手の席に梢が来てから、ポン！　ポン！　と判コをおし、
「持っていってや」
と気前よく叫んでいる。

あれでええのかな、会社つぶれへんか、と思うくらいである。
私の席は、二人のななめ向いである。
うつむいてペンを走らせていても、二人の会話はきこえる。
「ほんで、何べん見合してん」
「うーん。十二へんくらいかなあ」
梢は甘ったれてぞんざいな言葉を使う。そういう言葉はとても怒るはずの課長が、梢ならば何ともないらしい。
「うーん、そんだけ見合して、ええのん居らなんだか」
「いませんでした。あたしの気に入ったのは父が反対するし」
「あんたみたいな綺麗な娘、親は手放しとうないやろうなあ」
「どうかな」
「ワシでも放しとうない。ワハハハ」
いい気になってる。
おもしれえなあ。目尻下げてる男は面白い。
メーカーの人がきて、
「おやおや、桜井さんこの頃ちっとも出て来えへん思たら、そーんなきれいなん、横に引きつけて納まりかえっとったんか、それでは出られんはずや」
などとひやかしていた。

ほんとうに、梢が来て、事務所の中は、花がぽっと咲いたよう。目立つ美人であるのだ。
背はすらりとしているが、肉もぽっちゃりついている。
色白で、首がほそく、首すじは長い。なよやかにみえる。それに、ちょっと舌ったらずな甘エタ声なので、男たちは有頂天になるみたいである。
けれども、ウチの社内の、女の子は、梢のワルクチばかりいっている。
「あれ、美人かなあ」
と、郡山さき子がせせらわらった。
そういうのも無理はなく、さき子もかなり美人である。
いったいウチの会社には美人が多いのだ。（醜女は私だけである）
郡山さき子といい、岡田ミホ子といい、人目に立つ部類の美女である。
郡山さき子は現代風の、スタイルのいい、顔立ちもひきしまって化粧の上手な美人である。
岡田ミホ子は日本風の、やさしげな美人である。
またさらにいえばさき子は二十八で、ちょうど熟れざかりといった美しさがあり、ミホ子は三十すぎで、しっとりした年増美、ということもできる。
ほかの若い子も、みなかなりの線をゆく美女であるが、その中でもさき子とミホ子は自信があるらしい。
取引先の荒井ガラスの社長は、はじめ、この二人のうちどちらかをねらっていたらしい。
荒井ガラスさんは、おくさんを亡くしたやもめである。まだ四十前である。荒井ガラスさんは

自分の趣味や年恰好からミホ子がよいと思い、またさき子もモダンな美人なので、そっちにも目移りしているようであった。

「バカにしてるわ」

といいながら、さき子もミホ子も、荒井ガラスさんを意識して、まんざらでもないらしかった。

去年の夏、難波神社のおまつりに、荒井さんは、私たち会社の女の子をひきつれていってくれた。御堂サンとよばれる神社である。いっぱいの人で、たくさんの店が出ていた。水中花だの、花火だの、安物の指環、とうもろこしにたこ焼き、綿菓子や金魚釣りなんかの店がびっしり並んでいる。女の子たちは、花火や綿菓子をいくつも買い、荒井さんはそのたびに太っぱらに、

「よろしがな、よろしがな」

といって金を払ってくれた。

この人は大きな軀つきの、もこもこした顔で、色けのない熊のような人であるが、わりにウチの社の女の子には好かれている人である。

それは荒井さんが独身で、結婚相手を物色中のため、女性にたいそう関心がある。それを女の子は知っているためだろうと思われる。

口に上手はないが、会社へ来ると、

「こんにちは。毎度大きに」

と女の子にまんべんなくあたまを下げ、腰の低いところも好感をもたれているのかもしれない。たとえ自分は荒井ガラスさんと結婚するつもりでなくても、候補者物色中という目で、ずーっ

と関心度の強い一べつをあてられるのは、女の子にとって、いやな気持のものではないからかもしれない。

ところがその荒井さんの視線も、私の上を、すーっと素通りしてゆくらしいのである。私は数に入らぬらしい。

しかし、お祭りの日は誘ってくれたので、四、五人で出かけた。美しい女の子が固まってさざめいて通るのは、人目を引くようであった。荒井さんも、わるい気はしないみたい。

本殿で拝んで、あっちの店へ寄り、こっちの拝殿に寄り、していると、みんなとはぐれてしまった。やっと人波の中を、荒井さんに会った。

「岡田ミホ子さん知りまへんか」

「知りません」

「おかしいな、おかしいな。さっきまでおったのに。おかしいな」

荒井さんは汗しとどになっている。

「このえらい人ごみではぐれたら、どもならんなあ。えらいこっちゃな……」

荒井さんは舌打した。

そのさまは、私の思惑なんか考えてもいられぬという、せっぱつまった様子であった。

（さよか、ハハァ）

という気だった。荒井さんは、たぶん岡田ミホ子とデートする約束だったのだろう、でも一人だけ誘いにくいので、私たちまで一しょに誘い、あとうまいこと二人で一緒になる約束でもして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com